

についての7病例を経験したので報告した。

大腿骨骨頭(無腐性)壊死とは大腿骨骨頭の血行障害により壊死をきたすものといわれ、中年の男性に多いとされている。これには種々の原因がかつて報告されており、それによると、大腿骨頸部骨折、外傷性股関節脱臼等、外傷後に発生するものがしばしばみられ、また潜函病によつて時にみられる。前者は外傷による大腿骨頸部の一次的な血行障害によるものであり、後者は窒素ガスの栓塞による二次的な血行障害に起因するものと考えられている。この他に、ある種の血液疾患(鎌状細胞貧血、先天性溶血性貧血)、ゴーシェ病、膠原病(全身性エリテマトーデス)、ペルテス病、変形性股関節症、股関節炎、肝硬変、内分泌疾患(クッシング病)、ステロイドホルモン大量投与、そして放射線障害によつても認められる。上記の疾患以外に、原疾患がなく原因不明であるが、病理学的、レントゲン学的には骨頭の血頭の血流遮断が主役である特発性大腿骨骨頭(無腐性)壊死もみられる。

演者らは大腿骨骨頭(無腐性)壊死と診断した7症例を経験した。その内訳は、ステロイドホルモン投与によるもの、特発性のものと各2症例を数え、大腿骨頸部骨折後のもの、放射線照射によるもの、そして変形性股関節症によりみられた大腿骨骨頭(無腐性)壊死と、各1症例である。この7症例についての発生、症状、レ線所見、診断、治療、経過、予後について、若干の考察を加え、報告した。

5. Pheochromocytomaの2治験例

(心研)

○初音嘉一郎・橋本 明政・窪田 倭・
石原 昭・三森 重和・松本 陽子
(小坂内科) 佐藤 春子
(麻酔科) 太田 一朝・岩淵 汲
(中検病理) 平山 章

褐色細胞腫(Pheochromocytoma)は副腎髄質その他の部分に存在するクロム親和組織を発生母地とする腫瘍で、間歇的あるいは持続性血圧亢進という特有な臨床症状を起すもので、高血圧症の0.3%はこれに帰因するといわれる。近年とみに症例も増え、内分泌学的にも注目され、手術成功例も増えつつある。最近われわれもこの2例を経験し、腫瘍の剔除によつて治療せしめ得たのでここに症例を報告する。

症例1は12才女児で、昭和42年8月盗汗増量出現し、翌年5月発汗多量、体重減少、頻尿等出現、44年3月には155/105mmHgの高血圧、および基礎代謝亢進に気づ

かれた。本年6月虫垂切除の際、血圧変動甚だしく、頭痛、動悸、四肢の冷感および紅斑を主訴とし、同年7月心研受診、入院す。210/160mmHgの高血圧あり、血圧の動揺甚だしく、基礎代謝亢進、タンパク尿あるも、甲状腺、腎機能に異常なく、電解質正常なるも尿中カテコールアミンの増加あり。動脈撮影で右副腎腫瘍を証明、右副腎褐色細胞腫として同年8月手術施行、同腫瘍を剔出す。術後、血圧および尿中カテコールアミンは正常に復し、症状は消滅。組織化学的にも褐色細胞腫の診断確定さる。

症例2は19才の女子で、45年5月右眼が波うつように見え、焦点が合わないのに気づき、当院眼科を受診した際、右眼底出血、タンパク尿、高血圧あり、腎炎として小坂内科に入院。右季肋部に抵抗を触れ、血圧の変動甚だしく、血糖値上昇、基礎代謝亢進あるも甲状腺、腎機能および電解質正常で、尿中カテコールアミンの増加あり。動脈撮影で大動脈左側に腫瘍を認め、パラガングリオーマと診断、手術により同腫瘍を剔出す。術後、血圧、尿中カテコールアミン正常に復し、症状消滅す。組織化学的にも診断確定さる。

本症の診断における内分泌学的検索および後腹膜気腹撮影ならびに大動脈造影の役割りにつき若干の考察を加えた。

6. [症例検討会]

皮膚の悪性腫瘍

司会 中村 敏郎教授

追つて全文を本誌に掲載する。

7. [綜説]

Australia 抗原 (Hepatitis Associated Antigen)
について

(輸血部) 村上 省三

Australia 抗原は1965年 Blumberg らにより、Australia 原住民の血清中に発見されたため、上記のように命名された沈降抗原である。その後、Blumberg, Prince, Okochi らにより数種の疾患、ことに輸血後肝炎と深い関連を持つことが明らかにされ、にわかには注目をひくにいたり、今日では輸血後肝炎の病原 virus ないしはそれに近い物質であるとされており、“H.A.A.” (Hepatitis Associated Antigen) と略称されている。

輸血部においても、昨年5月から Australia 抗原および抗体の検出を日常業務の一つとして取り入れ、供血者においては抗原陽性者の排除につとめている。陽性率は約0.7%であり、男性により多く、また年令的には青年